

－ 原著論文 －

幼児の遊びの「ため込み」を促す環境設定と 音・音楽を通した表現の発展

－事例に基づいた保育者の語りの質的分析－

小松原 祥子 吉田 絃子

Encouraging "Hoarding" of Play in Young Children
Environmental Setting and Development of Expression through Sound and Music:
Qualitative Analysis of a Caregiver's Narratives Based on Case Studies
Sachiko KOMATSUBARA Hiroko YOSHIDA

要 旨

本研究では、生活における音・音楽を素材とした遊びから音楽以外の世界にも拡大する子どもの感性の育ちに着目し、自由遊びを主体とした保育を行う幼稚園教諭の実践の観察・インタビューの質的分析から教諭による援助の手法を解明することを目的とした。研究方法としては、非参与観察、非構造化インタビューによるインタビューデータからKJ法と佐藤（2008）による質的データ分析法を用いて「環境」「感情」「実践」「身体」の4つの集約的コードを抽出し、それに基づいて解釈を行った。その結果、自由保育を土台として子ども達が様々な素材を用いて創造的な遊びができるよう環境設定をし、その遊びの経験の「ため込み」が充分に行われることによって、本物の楽器やそれを使った表現へと意識が移行し、発表会ではそれまでため込んだ経験を踏まえて、感性を働かせての様々な表現へと発展していく過程が明らかになった。

キーワード：幼児 (Young Children) 環境設定 (Environment Setting)
表現 (Expression) 音・音楽 (Sound and Music)

1. 緒言

(1) 問題の所在

イギリスの幼児音楽研究者ヤング (Young, S.) は、幼児教育における「聴くこと (Listening)」に関し、「知覚が鋭くなるように聴き、想像力豊かに意味深く聴き、音楽の展開に合わせて興奮しながら聴き、繊細な感覚で聴く」ことに焦点を置き、イギリスの就学前教育に当たる乳幼児期基礎段階 (Early Years Foundation Stage = EYFS) に即した教育実践の事例として、リスニングゲーム、録音された音楽による受動的聴取と積極的聴取など、焦点化した聴取の様々な方法とねらいを示している¹⁾。

これらはアイデアとして魅力的ではあるが、生活の中での音や音楽活動を通した長期的な視野での子どもの人間形成というよりも、音楽的発達に着目したものと言える。

本書が出版された時点での EYFS (2008) では、音楽は「創造性の発達」に含まれ、「子ども達の創造性は、彼ら自身の好奇心、探求心、遊びの支援を提供することによって伸ばさねばならない。例えば、多様な美術・音楽・動き・ダンス・想像力豊かなロールプレイ、数学、デザインとテクノロジーを通して、子ども達の考え、アイデア、感覚を探求し、伝え合う機会を与えられなければならない²⁾」と記述されている。

一方、幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されており、「表現」において「創造性を豊かにする」ことは挙げられるものの、生活の中で身近な環境と関わりながら感性や表現する力を養うことが目指されている³⁾。

技能目標や音楽的発達に焦点化するのではなく、園生活の中での感性の育ちに着目する場合、音楽だけではなく、幅広い領域にまたがって遊びが発展していくことを見据え、子どもが存分に遊べる環境設定と適切な援助を行う保育が必要である。

従って本研究では、園生活の中での自由遊びを中心とした保育を行う園を対象とし、幼児教育における音・音楽を通した育ちを支援する幼稚園教諭の教育実践に着目し、子どもの育ちと結びついた音・音楽について探求することを研究課題とする。

この課題に関するこれまでの研究としては、観察⁴⁾と実践者による省察とインタビュー⁵⁾を用いた質的研究を進めてきた。

そして研究協力園でギターを用いた保育を行うA教諭(仮名)の実践観察とインタビューの現象学的分析により、教諭の「聴いて」という願い、幼児が自発的に「聴く」主体性、ギターのコード伴奏と教諭と幼児との歌により、共に「自分の声が聴こえる」ことが相互作用として生じ、その結果「感じる」ことに繋がる実践構造が導き出された⁶⁾。

(2) 研究の目的

本研究では、教育歴17年以上のB教諭(仮名)の実践を観察し、その実践事例を踏まえてB教諭にインタビューを行い、インタビューデータの質的分析からB教諭の音楽的表現の幼児教育実践の手法を分析することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 研究の対象

①協力園について

本研究に協力して頂いた園は、神戸大学附属幼稚園である。神戸大学附属幼稚園では、長年にわたって取り組んでいる研究開発により、子どもの事実を根拠として見出した資質・能力カリキュラムに基づいて保育を行なっている。子どもが自分のしたい遊びを自ら選択し、関わることのできる好きな遊びの時間を重視しており、教師は子どもの姿を捉えながら様々な資質・能力に向けてねらいをもって支えている⁷⁾。

②研究協力者のB教諭について

研究協力者（インタビューイ）は神戸大学附属幼稚園のB教諭（仮名）である。教育歴は17年以上である。その中で神戸大学附属幼稚園と附属小学校との幼小の研究開発が行われた7年間は、5歳児クラス担任を2年間、小学校1年生と幼稚園5歳児クラスの担任をした後3年間4歳児クラス、研究開発終了後の2020年度は5歳児クラスの担任をしている。筆者（小松原）による保育の観察の中で、B教諭は表情豊かなピアノ演奏によって幼児と関わっており、ピアノ以外にも豊かな音楽的表現を用いて援助を行っている。

（1）インタビュー分析の方法

インタビューの仕方としては非構造化インタビューの形を取り、研究対象者の了承を得てICレコーダーによる録音を行った。B教諭のインタビュー1回目は2019年7月19日15時半から16時（場所：神戸大学附属幼稚園応接室）、2回目は2021年3月23日15時から15時半（神戸大学附属幼稚園5歳児保育室）に行った。

インタビューの語りの分析方法としては、まず、佐藤（2008）⁸⁾による質的データ分析法、及び川喜田（1991）⁹⁾によるKJ法を用い、語りの言葉を質的データとして概念化（ストーリー化）を行う。具体的には、①ラベル拡げ（語りを単文単位で切り分け、すべての単文のラベルを拡げる）、②ラベル集め（ラベルの意味が同じ意味を持つものまたは近接するものを集めてラベルのグループを作る）、③ラベルのグループ編成（ラベルのグループ編成ができると、ラベルをグループごとに重ねてまとめる）¹⁰⁾ ④集約的コーディング（グループに小見出し【コード】をつける）¹¹⁾ という手順で行う。

その上で、ディルタイ（Dilthey, W.）の「解釈学」（久野昭訳, 1973）¹²⁾を用いて解釈を行う。この分析方法の詳細に関しては、拙稿（2018）¹³⁾で取り上げている。

（2）観察の方法

音・音楽に関する園児らと教諭の非参与観察を行い、フィールドメモとICレコーダーによる録音を行った。

（3）調査期間

神戸大学附属幼稚園における観察は、2018年12月から2021年3月まで13回行った。日時は表1の通りである。

本稿では、これらの観察の中からB教諭の1回目のインタビュー（2019年7月19日）に関わる2018年12月13日の観察事例、2回目のインタビュー（2021年3月23日）に関わる2019年11月19日の観察事例を取り上げる。

て「ジングルベル」を自分で弾いたり、好きなように鍵盤をさわったりする子もいる。

アップテンポの曲調の自動演奏を鳴らしている間、「うるさい」と言って耳をふさぐ女兒がいた。周りの子ども、「うるさい」と言って耳をふさぎ始める。そこでB教諭が介入し、「何がいい？トナカイにする？」とその中のA児に聞きながらボタンを探り始める。音が出なくなったので、「じゃあ弾くね。トナカイがいい？」とA児に聞く。聞かれたA児は、少しぐずっている。

B教諭が電子ピアノで「赤鼻のトナカイ」を弾き始めると、それまで思い思いの遊びで遊んでいた室内の幼児たちが急に静かになり、それぞれの遊びを続行しながら聴き始める。

徐々に、トライアングルや和楽器を鳴らし始める幼児たちが出て来る。「合わせる」というよりも、音楽に合わせてそれぞれが好きに鳴らしている。途中で別の教諭が曲に合わせてタンブリンを鳴らし始める。しばらくすると幼児が演奏を止めたので、ピアノを弾いていたB教諭も止め、「お客さん（筆者含め、当日複数いた観察者）たくさんいるから恥ずかしくなった？」とA児に聞く。

この観察事例1に関するインタビューから、上記の4つのコードに関連するB教諭の語りを下記の通り抜粋する。

(1) 家族ごっこという遊びと環境設定による表現の発展

【インタビュー1回目 2019年7月19日】

「キーボードの中に、もうあらかじめセットされてるものがあるんです。こちらが入れたのではなく、色んなこうジャンルの曲がかかる。」

「子ども達だったら色々、切り替わって楽しいっていう。で、それを聞いて、好きなように、いつでも普段用意してある楽器を、鳴らして、で、リズムを合わせて楽しむっていう」

「4・5人の家族ごっこの遊びが、何日か続いてる、あの時期に、……誰かが、『クリスマスパーティ開きたい！』って言ったんです。その一声から、『じゃあそうしよう』って家族の、お楽しみに、なったんですね。自然と。で、『じゃあ、みんなが知ってる曲、がいいねえ』、みたいな感じで私の、色んな曲を、持ってきて、弾いたり」

「1学期2学期と、私の方から、状況設定をしたら、こんな風に、楽しい、家族で楽しめる、だから、彼ら日常、体験してるような中から、状況設定をすることによって、皆がその気持ちになって、楽しむ、経験を、1学期2学期と、積み上げていって。それの中で、じゃ、『ピクニックに行こう！』みたいな、『コンサートしよう』、っていう」

「楽器は、前から、好きな時に、ちょこちょこ鳴らしてたり、で、テープとか、CDかけて、童謡とか、そういうのに合わせて、鳴らしたり、ピアノ、とかプリキュア、とか、そういうので鳴らしたり、みたいなのはしていましたね。ただ、その時は、ただ、鳴らして、楽しい、っていう、こう……経験があって、で、その先で、家族ごっこ遊びの中で、それをとり入れてるって感じですかね。」

<考察>

生活の中で幼児が自らキーボードの自由演奏ボタンやCDデッキの再生をする【実践】経験を重ねることから、それを遊びに取り入れる事象が起きている。つまり、B教諭は幼児が音楽を自ら選んで聴くための【環境】設定をすることで、幼児が音楽を選んで遊ぶ【実践】経験を重ね、家族ごっこ遊びに音楽を取り入れる、という構造になっており、音楽だけの領域に留まらず、【環境】を通して・働きかけながら、子ども達同士で表現遊びが発展していく形である。B教諭の役割は、【環境】としてキーボードを設置するだけでなく、子ども達が家族ごっこを発展させていく中で出てきた発想の中で「コンサートをしよう」という音楽に関わる部分を援助し、かつ、キーボードが鳴らない、つまり【環境】に働きかけられない状況になった時、自らが【環境】として子ども達のリクエストの曲を演奏する、という形を取っている。ここで音楽はB教諭という【環境】を通した、子ども達の表現遊びを発展させるための媒介となっている。

(2) 自由に入出りできる空間的環境と音楽表現の発展

<インタビュー1回目 2019年7月19日>

B教諭「その周りの、その時にたまたま保育室にいた、別のごっこ遊びをした子たちだとか、たまたまお部屋にいた子たちだとかが、その、家族ごっこの子たちが、そこで、あれ、あんなキーボードだとか楽器触り始めると、興味持って集まって来る子もいるので、そんな子も含めた、あの集団だったんですね。それで、弾き始めたので、皆楽器鳴らし始めたりした。」

<考察>

ここでは、年齢やクラスの枠を超えて、いつでも【身体】を動かして保育室に入出りできる【環境】が設定されているため、楽器の音がすると子ども達が興味を持って集まって保育室に入ることができる。そこで行われている表現遊び（家族ごっこのコンサート）に音楽表現（楽器を鳴らして合奏する）で子どもたち自ら加わる。

ここから読み取れるのは、保育現場で音楽表現が発展するとは、【環境】を通して様々な遊びと融合したり行き来したりすることで、幼児同士の人間関係も通して感性が育っていくということである。

(3)「不快や」という感情

<インタビュー 1 回目 2019年7月19日>

B教諭「皆と一緒に演奏し始めたりすると、確かにがちゃがちゃして、「不快や」っていう感情があの子たちに、出て来るんですね。そういう時に、じゃあ……じゃあ、今は、あなたとあなたの音だけにしときねー、って言うよりも、何かベースになるものをこちらが弾くことによって、自然とそれに合わせる雰囲気ができてきて」

観察事例1のように、幼児が好きなように楽器を鳴らした結果、濁る音による「不快や」という【感情】が出てきたため、その感情に沿って援助するB教諭という人的【環境】による演奏が環境設定となる。それに表現で幼児が働きかける形となる。

3.2 観察事例2に基づく2回目のインタビュー分析

(1) 砂マラカス

以下、引用する第2回のインタビューに関わる事例として、観察事例2を示す。

<観察事例2>2019年11月19日 4歳児クラス

B教諭「昨日ね、見て見て見て見て見て。」B教諭、保育室奥側からペットボトルにどんぐりを10個くらい詰めたものを両手に持って子ども達の方を向いて座る。保育室奥には大きな窓があり、園庭の紅葉したもみじが見える。子ども達B教諭の持っているものに注目する。B教諭「マ・ラ・カ・ス」(言葉と同時に同時に振る)ざくざく音がする。B教諭「こんなのも作ったけど、また違うの、どんぐりちょっと少なくしていこ、ちょっとこんな音がするよーって、2つ作ったんだよね、Hちゃん。な、これとこれは音が違う」複数の子「前も作ったよ！」B教諭「聴いてみて、聴いてみてくれる？」左、右、とマラカスを鳴らす。後の方が低い音がする。子ども達口々に色んなことを言う。B教諭「じゃあさ、こんな歌知ってる？♪どんな色～が好き？♪」「あたし知ってるー！」すぐに複数の子が叫ぶ。B教諭「♪赤い色～が好き♪」子「あたし知ってるー！」B教諭の歌に合わせて、子ども達一緒に歌い出す。「♪一番さーきになっくなってるよ～あっかいクレーヨン♪」B教諭「知ってる人もいるね、知らない人もいるね」複数の子「知ってるー！」B教諭「じゃあ、今日は、どんな、色、じゃなくて……………」複数の子「どんながらくた」口々に色んな言葉を言う。B教諭「あ、」子「音！」B教諭「音ー！」B教諭「じゃあ、歌ってみるね、聴いてね。♪どんな音ーがする？♪シャカ、シャカ (拍に合わせてペットボトルを振る)」子ども達静かになる。B教諭「じゃあ、皆歌ってくれる？さん、はい♪どんな音ーがする？♪」子ども達一緒に元気よく合唱する。B教諭「どんな？」子「かちかちかち」B教諭「あ、かちかちかち、いいね。♪カチャカチャ音がする♪ (ペットボトル2回振る)」子ども達のつぶやきが聞こえる。B教諭、しばらく間を置く。B教諭「♪皆で鳴

らすと楽しいね～……………♪」A児「あ、分かった！」B教諭「何かいい言葉ない？♪皆で鳴らすと楽しいね～……………♪」子ども達口々に言葉にする。B教諭「♪皆で鳴らすと楽しいね～……………みんなで作ったマーラーカス♪」B教諭「どう？」子ども達、同時に色々な意見を言う。B教諭「じゃあ皆で、♪どんな音ーが好き♪（シャカシャカ）♪カチャカチャ音がする♪（シャカシャカ）皆で鳴らすと楽しいねー、みんなでつくったマーラーカス、（シャカシャカ）」子どもたち、最初の方一緒に合唱する。歌に合わせて子ども達左右に体を動かす。B教諭「（子どもの話聞きながら）うん、すごい！こんな、新しい歌できちゃったよ？」子どもたち数人口ずさむ。B教諭「さんはい、♪どんな音ーがする♪シャカシャカ（ウン）」子ども達口々に叫ぶ。B教諭「いいのいいの、色々あっていいの。皆がお耳が違うから。」(略)

B教諭、箱の中に入れたペットボトルを、子ども達に渡していく。子「カラカラ」「ゴロゴロ」ペットボトルを手にする、オノマトベが子ども達から湧き出て来る。B教諭「カラカラ、コロコロ。前と違う音見つけたら、今度集まって」子ども達、ペットボトルを手の外に駆け出し、園庭に散らばって、葉っぱ、砂など、様々な物をペットボトルに入れて振る子ども達。ある男児が砂をペットボトルに入れて横に振ると、B教諭が「お、こんなものもあるねー！」と、横に振る動作を真似る。

約束の時間になると呼びかけ、保育室ではなく、保育室前の中庭のような芝生の上に集まる。子ども達、それぞれのペットボトルを手、ざわざわと集まっている。B教諭「Dちゃんおいでー」（節付けて）B教諭「○○2組さん」呼びかける。C児「○○さん」「○○2組さん」ざかざか、子ども達がペットボトルを振る音。B教諭「二人組になってーすーわー！」何度か繰り返す。B教諭「じゃあ、ふったりーで鳴ーらす、ふったりーで鳴ーらす、ふったりーで鳴ーらす、ふったりーで鳴ーらす」教諭が何度もリズムカルに節をつけて呼びかけると、子どももそれを自発的に模倣する。B児「ふったりーでなーらそー」B教諭「じゃあ、今から、どんな音がしたか、聴かしてくれる？どんな音がしたかなー。」手を上げる子たち。B教諭「今挙げたR君と○○ちゃん」B教諭「じゃあね、皆で、♪どんな音ーがする？て言って、どんな音がするか、かさかさなのか、○○なのか、自分の音、考えとってよ？決めた？心で決めた？」子どもたち「うん」B教諭「じゃあ、どんな音がするか、言って下さい」B教諭、しゃがんで、立っている発表者のRくんを手で抱えるようにして声をかける。子ら「♪どんな音ーがする♪」B教諭「じゃあ、Rくんが！考えた、どんな音がする？」R（小さい声で）「どんしゃん」B教諭「ドンシャン！ドンシャン音がする。」D児「カチャカチャ」E児「サラサラや、サラサラ」

B教諭へのインタビューの中で、この観察事例に関連する語りを下記に示す。

<インタビュー> (2021年3月23日)

小：4歳さんはやっぱり、より、言葉で動くんじゃないくて、ちょっと感性的なっていうか。気

分…………。

B教諭：面白そうとか、楽しそうとか、先生がやってるとか、友達が面白そうとかいう、目、目で見ただものに飛びつく感じですね。

小：目で見ただもの。なるほど。

B教諭：もちろん、まあ、耳もそうですけどね。「なんか聞こえてきたな」、「いつもと違う音がするなとか」、「誰か、なんか、叩いてる」とかね。あの、うん。目立つことに、ぱっと、こう、やっぱり、行きますし。(略)

だから、あえて、こう、この子どもたちが気付くように、あえて芝生の環境で。ここで鳴らしてるより、あっち行って、ちょっとステージっぽく、私が環境をつくることによって、「なんかステージみたいだね」って。「あ、ここにお客さんがいたらもっといいね」とか言って、言ったら、みんな見に来て、聞きに来て、コンサートするよみたいのが自然に始まったりっていうのが、お部屋でするよりも、芝生に出てみんなから見える場所で、あえてそこに持っていくという、意図的にそういうことをしたりし。

小：4歳さん、ペットボトルで砂とか入れて、鳴らしたりされてましたよね。

B教諭：砂マラカス。

小：保育室内でやってみて、じゃあ、外、行って、砂、入れてみようって、ばあって行って。で、また、その芝生のまままで、歌に合わせてみたりみたいなことをされてましたよね。

B教諭：よくやりますね。ドングリのある季節にこう、ちょっとペットボトルかヤクルトの容器にちょっと入れとくとかいうふうなことを、置いとくだけで鳴らしてみる。「え、何が入ってんのん」っていうの見て。で、「こんなんが入ってる」よって。「ほな、別のもの入れたらどうかな、違う容器に入れたらどうかな、かんかんだったらどうかな、他に、なんか入れられるもんないかな」って、そこから、うわあっと広がって行って。ほな、「なんか入れ物に何かを入れて鳴らしてみるのが、なんか楽しい」ってなってきたら、いろんな素材を試せるようにいろいろなもの置いといたり。あの…………。

小：あ、置いとくんですね。

B教諭：はい。置いとくこともありますし。で、砂、入れたらどうかな、石やったらどうかな、水やったらどうかなみたいな、こう、試せるように外の、全部、環境、一緒に見に行ったりですとか。葉っぱ入れたら、なんかカシャカシャするねとか、枝、入れたらまた違う音がするねとか、ちっさい石だったらこうだねとか、詰めすぎたらこんな音が鳴んねとか。量的なこととか、なんかもう、いろんな音が試せるみたいな。そんなことは、こう、どんどん広がっていく、幼稚園だったら。

<考察>

ここでは、砂・石・水などの素材を入れて試せるように、外の【環境】を一緒に見に行く。

そこで子ども達は自分の【身体】を動かして素材を拾い、様々な音を探す。また、いろんな素材を試せるようにいろんなものを「置いとく」という【環境】設定をし、子ども達が【実践】できるように仕掛ける。それによって「量的なこと」、すなわち幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」¹⁴⁾に通じるようなことを、中に入れる素材の量によって体験することができる。そのような体験を子ども達が「なんか楽しい」という【感情】を持つことにより、「どんどん広がっていく」。そして観察事例後半のように、保育室でなく外の芝生で「あえて」「みんなから見える場所」で行うことで、周りの子ども達が「面白そう」「楽しそう」という【感情】を持って「見たもの」「聞こえてきた」ことで「気づく」よう【環境】をつくる。

このような経験は、下記のように年齢を超えて広がっていく。

(2) 経験の「ため込み」

<インタビュー> (2021年3月23日)

小：じゃあ、例えば、私ちょっと、見せてもらった、4歳さんのペットボトルで遊ぶみたいなことを、5歳さんになってもやるようなことはあるんですかね。

B教諭：あえて、マラカス作りをしましょうって言わなくても、その辺で、なんか、勝手に子どもたちがやり始めたりします。

小：なるほど。

B教諭：はい。その、そういう下地、もう3歳のときからマラカスみたいなのはね、ドングリ拾い大好きなので、ドングリ拾ってきて何かに入れといたら、「カチャカチャいうね」って。コップに入れて鳴らすことから始めて、で、何か閉じるものに入れたら、「こんなになるね」とか。本当に最初は、カンカン、あの、中の見えない、蓋のできるカンカンで「面白い音がする」っていうのをやって。そこから今度はペットボトルにいたり、また、中が見えるものに、こう、変えて。で、それを一人一人がみんな、こう、テープ貼ったり絵を描いたりして、こう、今度は造形的な、世界に一つだけの私のマラカスっていうふうに、こう、そこから造形的な学びもできるように、音楽だけじゃなくて、幅広くいけるように、そうしたり。いろんな、ことをして、それをまあ、3歳、4歳でいろいろやってると、あまり、ま、もう、5歳で、「ああ、これマラカスね」っていう。むしろ本物のマラカスとか。

で、本物の、ああいうのに今度、行きますし。で、大体これ、「あんなものが入るとんかな」、なんて想像したりする姿もありますし。あとは、「それにどう合わそうか」とか。で、「タンバリンと合わしたらどうかな」とか、音楽をかけといて、「じゃあ、実際それで踊ってみようか」っていう。で、3・4歳はもう、その自分の作ったマラカスを大事に持って園庭に行って、で、「一緒にここで踊ろうか」って。そのときになんか、「プリキュアになりたいわ」なのか、「プリンセスになりたいわ」かによって、今度は、「じゃあ、飾り付ける」とか、「ドレス付ける」とか

いうふうに、こう、そこからコンサートとかプリンセスごっこに発展したり。いろんな、遊びに、こう、また進んでいくって。どんどん広がっていくって、そういう経験をもう、3歳、4歳で散々していたら、5歳は、そうですね、それを使って、あ、あのときこんなふうに作ったから、この遊びで、「これ、使えそうやね」っていう、なんかこう、ため込みが3歳、4歳にあればあるほど面白くなってくるんです。

<考察>

「ドングリ」「コップ」「カンカン」「ペットボトル」という素材を用いて音を聴くことを【実践】することで「面白い音がする」という【感情】が表出し、そこから「テープ貼ったり」「絵を描いたり」して【身体】を使って【実践】することで「音楽だけじゃなく」「造形的な学び」も「幅広くいけるように」していく経験を3歳、4歳で積み重ねることにより、5歳には「本物のマラカス」という楽器で【実践】する。そこで、これまで素材の遊びとして中に色々なものを入れて聴き、【実践】する経験をしたことから、楽器を素材として捉え、「あんなもんがはいっとんかな」と想像する姿が見られる。子ども達が様々な素材を用いた楽器づくりを【実践】することを「散々していた」からこそ、自然に楽器の造りに関心を寄せたとと言える。そこから、「タンバリンと合わしたらどうかな」と合奏を【実践】すること、音楽をかけておいて「踊ってみよう」、そして「自分の作ったマラカスを大事に持って園庭に行って」という形で【身体】を動かし、3、4歳児と「一緒に踊ろう」と【身体】表現の領域に発展し、素材と【環境】を利用して【身体】を使って【実践】するという「ため込み」が「3歳、4歳にあればあるほど」遊びが拡大していく。

そしてこれらの経験が下記のような発表会での姿に繋がる。

(3) 発表会

下記のインタビューで語られる「発表会」について特徴を述べる。

B教諭の園では発表会を保育参観と位置付けし、完成されたものを見せる行事的なものではなく、保育の延長として子どもたちの取り組んでいる過程を含めて保護者に見ていただく場としている。年小児、年中児での発表会では、主にお話の世界の中でなりきって遊ぶ表現遊びを中心とし、子どもの興味関心、遊びの姿など、子どもの姿をベースとして題材を決め、教師や友達と一緒に話を作り上げていく楽しさ、イメージを膨らませながらなりきって遊ぶ面白さを感じられるように、様々な資質・能力と共に子どもの育ちを支えている。

一方、年長児の発表会は、これまでの経験を基に、それぞれの子どもたちが自己発揮しつつ、グループの友達と共通の目的を自分たちで設定し、相談したり、話し合ったりし、試行錯誤しながら自分たちで様々な課題を解決して乗り越え、自分たちの発表を作り上げていく充実感を味わえるようにしたいと考えている。そのため、学年や学級集団で取り組む発表会ではなく、「挑

戦する」、「生み出す」、「友達と力を合わせて」をキーワードに、自分の発表したいことを決めて、したい発表が同じような友達とグループになって発表している。発表会といえば劇遊びのイメージがあるが、本園の年長では、劇の他にも、ダンス、こま回し、縄跳びなど、様々な内容での発表がみられる。

また、発表会の最後には、自分たちの発表会の締め括りとして、これまで3年間過ごしてきた日々を振り返りながら大きくなった自分を感じたり仲間とのつながりを感じたり、お家の人への感謝を伝えたりする機会として学年全員で歌を歌っている¹⁵⁾。

<B教諭へのインタビュー> 5歳児の発表会前の保育について（2021年3月23日）

B教諭：5歳のもう、それこそ発表会に最後の、集大成っていうか、もう、自分たちの今までの、「大きくなった自分たち見てもらおうね」という目的でやったときには、「私たちのグループはダンスをしたいわ」というふうな。こないだも「ダンスをする」というチームがあったんですけど、同じダンスやりたい人同士で組むんですね。「ダンスやりましょう」とこっちが決めるんじゃなくて、「何やりたい」で、「ヨーヨーやりたい」という人がいたり、「ダンスやりたい」という人がいたり、人形劇やりたい人、こま回しやりたい人、それから縄跳びやりたい人、フープやりたい人って、こう、いろんな人が出てくるので。全部、そういう「同じようなこと、できそうなお友達とグループ組もうね」と言って組むんですね。

で、組んで1カ月間それに向けて、発表会に向けてずっと頑張っていくんですけど。どんなふうに自分たちの発表をつくり上げていくか。その中で、こないだは、ダンスをしたいグループと、その中にヨーヨーをしたい人たちが2人ほどいたので、2人じゃ寂しいので、「グループを決めるときに、7人か8人ぐらいまでのお友達と話をして、相談しながら自分たちで発表を生み出すんだよ」と。「それが、S組の発表会だよ」というふうな、そういう私たちの願い。

あの、「多すぎてもやりにくいよね、お話ししにくいから。でも、少なすぎても寂しいよね。だから、7人か8人ぐらいまでの、5人より多いグループを組もうね。で、そのためにやりたいのはなあに」と聞いて、で、「じゃあ、ダンスやりたい人とヨーヨーやりたい人、2人いるけど、ダンスの4人と一緒になんか組めそうかな」と言って、そういう「じゃあ、4人と6人に、2人で6人になるね。あ、5人以上だね。OK、OK」と言うて、グループを組むんですよ。

で、ヨーヨーやりたい人とダンスやりたい人が話をして、で、まあ、結果的には音楽を鳴らして踊りたい人たちなので、「じゃあ、ヨーヨーもその音楽に合わせて、なんか、こんなできそうかな」と言って、ダンスの人もヨーヨーに挑戦して、その音楽の中で「ダンスの途中に、ヨーヨーを見せるという場面をつくらうか」とみたいな、そんなんを話し合いながらつくっていったんです。

で、そんな中で、じゃあ、「ただ踊るだけだったら、それだけだったら、見てる人から見たらもっと楽しくなるようにどうしたらいいだろう」って。で、「曲も3曲ぐらい選ぼうか」って言って、あの、『ミッキー・マウス・マーチ』とNiziUの『Make you happy』と、それから『WAになっておどろう』の3曲、決まったんですね。1曲目はヨーヨー1個、途中からヨーヨー。ちょっと曲の感じが変わると、「あ、ここやったらヨーヨー入れられそう」みたいな。散々、音楽を一緒に聴いて、「どこでヨーヨーできそうかな」って言うて、こう、最初は普通に踊るんですけど、その後でちょっと曲想が変わるところに気が付くんですね。「ここだったらヨーヨー入れられそうかな」っていうの。まあ、もちろん、教師も一緒に考えながらなんですけど。

で、そこからもみんながこう、その2人が「ヨーヨーやりたい」って言ったんですけど、他のダンスやりたいって言ったお友達も、それも一緒にやって、それを見せ場にする。で、最後、それでポーズを決めるってんで、2曲目は、じゃあ、「ポンポンを作って踊りたい」って。こう、何かを、ステッキを振り回して、踊ったりみたいな経験もあるので、「なんか作って踊ったらすてきじゃない」って。で、「ポンポン作りたい」ってなって、で、みんなでまたポンポンを作る。作り合って、教え合って作る。で、それでポンポンで踊るのが、その2曲目で。

で、3曲目はもう、衣装。衣装作り。もう、散々、もう、ビニール袋の中の、カラーのビニール袋に穴、開けて袖、作って、飾り付けてっていうのも、好きな女の子たちもいっぱいいるので。そういうのもう、散々、4歳のときにやってきた経験で、ぱあっと「先生、ビニール袋が欲しい」って自分たちで言って、用意したら、もう、たったかたったかたったかたったか作って。

<考察>

ここでは、見てる人がもっと「楽しく」なるようにという他者の【感情】に焦点を当て、踊りという【身体】表現だけでなく音楽も聴いて【実践】する。そして「散々」音楽を一緒に聴いて、「踊る」という【身体】表現を行っているうちに、「ちょっと曲想が変わる」ことに子ども達が「気が付く」ことで、「あ、ここだったらヨーヨー入れられそう」と【身体】を使って「実践」する。

さらに「ポンポン」という素材を「作って踊りたい」「ビニール袋が欲しい」という【感情】が子ども達から湧き出て、B教諭はその【環境】を「用意」する。これらは全て、「散々」4歳のときに行ってきた【実践】経験が土台となっている。

4. 総合考察

以上のB教諭の実践観察に基づいたインタビュー分析により、B教諭による幼児の音・音楽を通した育ちを支援する実践手法は、下記の図のように考えられる。

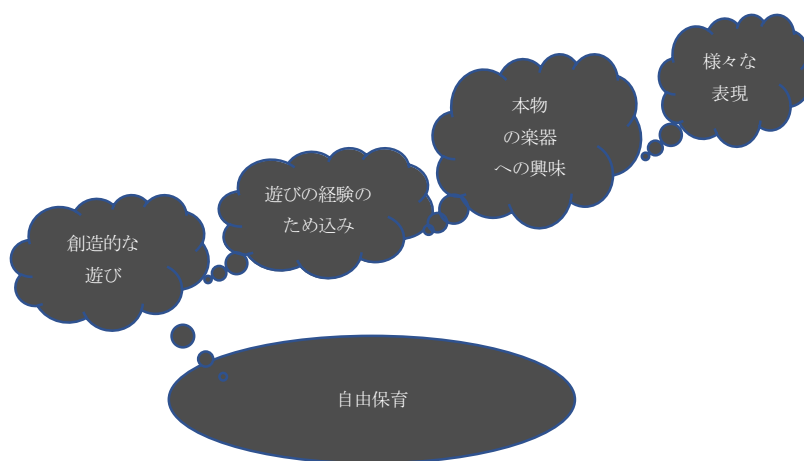


図1 B教諭による幼児の音・音楽を通した育ちの支援

B教諭の2019年11月19日の観察事例では、複数の子どもが「前も作ったよ！」と言っているように、いつも実践しているペットボトルマラカスの遊びから、皆が知っている歌を「じゃあ、今日は、どんな、色、じゃなくて……………」という形で替え歌にして歌ってマラカス伴奏を加えることで、子ども達同士で共通の体験をし、一体感を出している。これをさらに素材によって「どんな音」がするか、「かちゃかちゃ」といった、それぞれの子ども考えたオノマトペを音楽の形式で実践している。

ここで子ども達が色々な音を出すことができたのは、B教諭と共に外の【環境】に【身体】を動かして出ていき、【身体】を動かしてペットボトルを横に振る動作をB教諭が真似したりすることにより、子ども達の世界と時間、【感情】を共有していたこと、そしてそのような経験を「散々」行ってきた「ため込み」という蓄積による。

つまり、図1に示したように、自由保育を土台として子ども達が様々な創造的な遊びができるよう環境設定をし、その遊びの経験の「ため込み」が充分に行われることによって、本物の楽器への興味関心が自然に高まり、それを使った様々な表現に発展していくのである。

前述の3.2(2)「経験のため込み」のインタビュー事例で示したように、B教諭は、「様々な素材との関わり」から「本物の楽器や、音楽を聴いての様々な表現への興味関心の高まり」へと至る子ども達の育ちを見通している。これは、幼小の連続性も踏まえた系統的な遊び(学習)と言える。その重要な点は、①素材を使って存分に遊ぶ。②遊びを充分に行うと今度は、本物の楽器やそれを使った表現へと意識が移行する。③発表会では、それまでため込んだ経験を踏まえて、感性を働かせての様々な表現へと発展させていく構造となっている。

謝辞

本研究を実施するにあたり、インタビューをさせて頂いたB先生、フィールドワークをさせて頂きました神戸大学附属幼稚園の園児さんと保護者の皆様に深く御礼申し上げます。また、研究方法に関し貴重な御助言を頂いた松山東雲短期大学の崎浜聡先生に感謝申し上げます。

付記

本研究は、2018年度～2019年度は小田原短期大学「小田原短期大学研究倫理委員会」、2020年度～2021年度は「神戸女子大学・神戸女子短期大学人間を対象とする研究倫理委員会」（受付番号2020-24-2）研究課題名「幼児期の音楽表現の育ちに関する質的研究－保育者の実践体験の構造分析から－」の研究倫理審査で承認を得た上で、研究対象者から研究承諾を頂いている。

註及び引用文献

- 1) Young, S. (2009) *Music 3-5*, Routledge.
- 2) Department for Education (2008) *The Early Years Foundation Stage-Statutory Framework*, p.15
- 3) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』
- 4) 小松原祥子 (2019) 「幼稚園の自由遊びにおける『聴く』ことがもたらす表現への影響－4・5歳児の観察による事例分析－」『保育を考える研究会研究紀要』第1号, pp.47-55.
- 5) 小松原祥子・西山隆子・山崎瑠衣 (2020) 「幼稚園における遊びの延長としての『生活発表会』における音楽の役割－4歳児の劇遊びを中心とした保育者の援助の在り方－」保育を考える研究会『保育を考える研究会研究紀要』pp.85-14.
- 6) 小松原祥子 (2021) 「幼児の音楽表現に関する保育者の語りに現れる実践構造－ギターでの保育を行う幼稚園教諭のインタビュー分析－」神戸女子短期大学『論攷』第66巻 pp. 7-22.
- 7) 神戸大学附属幼稚園研究紀要38号 (2019) 『「幼小接続」から「幼小一体」へ－9年間を一体としてとらえた「初等教育要領」の充実を目指して－』
- 8) 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』新曜社
- 9) 川喜田二郎 (1991) 『KJ法－混沌をして語らしめる』(第9版) 中央公論社
- 10) 川喜田, 同上, pp.125-130.
- 11) 佐藤, 同上, pp.99-104.
- 12) ディルタイ (久野昭 訳) (1973) 『解釈学の成立』似文社
- 13) 小松原祥子 (2018) 『『表現指導法』としての幼児の器楽合奏指導法に関する理論的研究－質的分析を用いた自由記述の評価方法とは－』『幼児教育における表現 I (理論的研究編)』三恵社, pp.46-62.
- 14) 文部科学省 (2018), 同上
- 15) 以下に、歌の場面のねらいや環境構成・教師の援助について本園の「遊びや生活のまとまりとしての計画」(年長児) から抜粋・一部編集した表を紹介する。

表 2

D【みんなで歌を歌う】		
予想される 子どもの活動	ねらい	* 環境の構成 ◎教師の援助
<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌詞の意味を考えながら歌詞を聞く ・ 歌詞の意味を感じながら歌う ・ どう感じてほしいかや見る人がどう感じるかを考えて、歌い方や並び方、入退場の仕方、曲紹介や終わりの言葉を決める 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 歌詞の意味を自分の状況や心情と重ね合わせて歌ったり、友達と気持ちを合わせて歌ったりする充実感を味わう。 ○ 見ている人がどう感じているかを考えて、感じてほしいことをより効果的に表現するために、並び方や入場の仕方等を考え表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> * 歌に込められた気持ちを感じたり、大きくなった自分や仲間とのつながりを感じたりしながら歌えるように、修了が近く、もうすぐ小学校へ行く今の時期の心情と重なる歌を選ぶ。 ◎ 歌を通じて自分の気持ちや感謝を伝えることを意識しながら歌えるように、歌詞がどういう気持ちを表しているのか、自分たちの心情と重なる部分はこういったところか、子どもと話をしながら歌詞を伝えたり、その気持ちを思いながら歌いたい思いを共有したりする。 ◎ 聴き手がどう感じるかを考えて、感じてほしいことがより伝わる方法を考えられるように、歌い方をどうしたいか尋ねたり、どんな方法があるか例を挙げたりする。 ◎ 見ている人がどう感じるかを考えて、感じてほしいことがより伝わる方法を考えられるように、並び方や入退場の仕方、発表の終わり方をどうしたいか尋ねたり、どんな方法があるか例を挙げたりする。

(神戸大学附属幼稚園研究紀要38号(2019)『「幼小接続」から「幼小一体」へー9年間を一体としてとらえた「初等教育要領」の充実をめざしてー』p.47より 一部編集)